



3. 刺繍加工業

戦後、家内工業から刺繍加工業へ発展

布に装飾を施す刺繍の技法は、東洋では紀元前千年頃にモンゴルで、西洋では紀元前三千年頃にエジプトで始まったとされている。日本へはおもに中国から伝わり、日本でもっとも古い刺繍は聖徳天皇の命で621年につくられた「天寿国曼荼羅^{てんじゅこくまんだらしゅうちやう}繡帳」(聖徳宗中宮寺所蔵)である(奥平[1969]53頁)。その後、絹文化の発達・普及とともに刺繍の技法も発展し、宗教的な意味合いのものから衣装や室内装飾に使われるようになった。明治期に入ると、化学染料が登場し、染織技術の近代化と同時に色彩も豊かになり、紋様や構図なども大きく変化した(奥平[1969]56-58頁)。そして、刺繍加工業は家内工業として発展し、日本の技術は世界的にも高い評価を受けた。

産業としての刺繍加工業の発達は戦後以降である。その背景には、戦後の日本経済を支えた繊維産業の発展がある。タオルを含む繊維産業の隆盛によって刺繍加工業は二次加工業として成長を遂げ、機械化が進んだ。1964年は東京で最初に「東京オリンピック・パラリンピック」が開催された年であるが、この年に結成された「日本ジャガード刺繍工業組合(JEA)」 (大阪市)は、日本標準産業分類に刺繍加工業が追加されるように政府に働きかけ、その結果1967年に日本標準産業分類に「刺しゅう業」 (「中分類 11 繊維工業」「119 その他の繊維製品製造業」「1196 刺しゅう業」)が追加・設置となった。

つづいて、城東刺繍の創業年である1976年には、「中小企業近代化資金等助成法」において刺繍加工業が指定業種に指定され、機械設備の急速な近代化を後押しした(日本ジャガード刺繍工業組合ホームページ)。

表1は、2015年から2019年における全国の刺繍加工業者の推

移である。2019年時点で事業所数310、従業者数3,237人であり、年々減少傾向にある。また、製品出荷額等と付加価値額も年を重ねるたびに減少しており、刺繍加工業は縮小していることがわかる。城東刺繍はタオル専用の刺繍加工業者であり、刺繍加工業者全体からするとわずかな割合しか占めていないが、大まかな動きはほぼおなじと考えてよい。何より後継者問題は深刻である。城東刺繍も「なんとかせないかんとおもっているんやけど」、今のところ対策はとっていない。

表1 2015年～2019年における刺繍加工業の事業所数・
従業者数・製造品出荷額等・付加価値額の推移

年	事業所数	従業者数(人)	製造品出荷額等(百万円)	付加価値額(百万円)
2015	424	3,977	23,435	14,572
2016	353	3,758	23,289	14,202
2017	329	3,628	22,127	13,349
2018	325	3,560	21,968	13,431
2019	310	3,237	19,601	12,349

注：従業者4人以上の事業者を対象とした数値である。また、付加価値額については従業者29人以下は粗付加価値額である。

出典：経済産業省「2020年工業統計表 産業別統計表データ」（2021年8月13日掲載）より作成。

「タオルに刺繍を施す」ということ

昭和から平成、令和へ、時代をへるにつれてタオルの品質は数段上がった。高度成長期、安定成長期をとおして大量生産のモノづくりが主流になるなかで、クオリティの低いタオルが製品として流通していた時期もある。「事業を始めた頃は刺繍さえ入っていればええのかと疑うほど低品質のタオルも結構ありました」と淳三氏が言うように、粗末なタオルも出回っていた。しかし、今はそうではない。刺繍もそうである。

中国で刺繍加工を依頼する企業もあるが、品質の差は歴然としている。キレイな刺繍は、手間とコストを惜しんではできない。丁寧

な仕事は製品に反映する。美賀子氏は、「タオルに刺繍があってもなくても使う分にはあまり困らないんですけど、かわいらしい花や動物が付いていることで、喜んでもらえることが嬉しいかな」と控え目に言うが、どんなに小さな刺繍でもクオリティの違いは確実にわかる。刺繍加工もそうであるが、モノづくりに欠かせないのは几帳面な働きぶりである。

刺繍を施すことで贈る人、贈られる人に「特別感」が生まれる。それゆえに、たとえば城東刺繍が以前受注した仕事用の刺繍入りタオルは、タオル生地も刺繍用糸も通常より上質の素材が選ばれ、割高なオーダーであった。贈る側は、自らの名前やブランド名を刺繍したり、ロゴマークを刺繍したりするため、製品のクオリティそのものが贈られた人びとに「格」として伝わる。贈られる側は、名前やブランド名が入ることで、「限定」された特別な感覚を抱く。城東刺繍でもコロナ禍で影響を受けたが、こうした割高な注文は断続的に入ってくる。

4. お気に入りの本

読書好きの二人、読み物に個性あり

桧垣夫妻は読書が好きである。淳三氏は歴史小説、推理小説が好きである。美賀子氏は漫画が好きである。

事務所にはほんの一部であるが、本棚に二人のお気に入りの本が並べてある。そのなかに淳三氏が手元に置いて何度も繰り返し読んでいる本があった。それは歴史小説でも推理小説でもない。27歳で始めた溪流釣りの本である。『高木國保の続旅ゆかばヤマメ・イワナ（別冊フィッシング第12号）』（廣済堂出版、1994年）と『溪流スペシャル1997（週刊釣りサンデー別冊）』（ムック、1997年）である。読み込まれてボロボロになった2冊の本を見るだけで、いかに淳三氏が釣り好きなのかが伝わってくる。

美賀子氏が最近よく読む漫画は、隔週で発売される漫画雑誌の連載ものである。ちょうど事務所に読んだばかりの『ビッグコミックオリジナル』が置いてあったので、好みの連載漫画を尋ねると、「風の大地」（作・坂田信弘、画・かざま鋭二）と「釣りバカ日誌」（作・やまさき十三、画・北見けんいち）という回答が返ってきた。

とくに「風の大地」は、毎回楽しみしているゴルフが主題のストーリーである。「一球打つのに一話。なかなか進まんのよね」と美賀子氏。漫画を読む時間は、忙しい合間にふと緊張が解ける、美賀子氏の至福の瞬間である。（次号につづく）



事務所の本棚に所狭しに置かれた本



「ビッグコミックオリジナル」
（毎月5日・20日発売）小学館。

